

## 【基調講演】 「ウクライナ問題の歴史的背景」



元駐ウクライナ特命全権大使  
元日本大学国際関係学部教授 黒川 祐次

Former Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of Japan to Ukraine  
Former Professor College of International Relations, Nihon University

### はじめに

皆さん、こんにちは。黒川祐次です。よろしくお願いたします。

先ほどご紹介いただきましたように、私はこの三島で十何年勤めておりました、その間、立派な同僚の先生方に恵まれて、非常に楽しく過ごさせていただきました。本当にありがとうございました。この度はまたお招きをいただいて、懐かしいこのホールで皆さんの前でお話ができることとなり、とてもうれしく思っております。この機会を与えていただいた渡邊学部長、伊坂研究所長、その他の皆さんのご厚意に心からお礼申し上げたいと思います。

### ウクライナでの勤務

私は1996年から99年まで3年近くウクライナの大使を務めました。ウクライナの首都、当時はロシア語風にキエフと呼んでいましたが、今はウクライナ語でキーウと呼んでいますが、そのキーウに大使館ができてから2代目の大使でした。独立してまだ5年という、本当に新しいほやほやの独立国の中で3年近くを過ごしました。

ウクライナは、元はソ連の一部としてソ連邦を構成する一共和国でした。それが1991年に突然独立したわけです。ソ連は非常に中央集権的な国家で、共和国といっても日本の県よりはるかに権限が少ない。それが独立国家の中央政府としてやっていくだけの陣容も準備もないまま、ある日突然、例えば静岡県が静岡共和国になったという感じで独立し、大混乱に陥りました。まさに県が国として国際社会に突然放り出されたようなものでした。

それまでは共産主義体制、共産主義経済でやってきたのが、これからは自由主義経済だ、資本主義経済だということになって、その新しい経済システムの中で、世界のことをほとんど知らない人たちが国を運営していかないといけないという中で大混乱となり、経済はガタガタになってしまいました。

そういう中で私は大使として赴任しました。

何が私の一番の仕事だったかというと、ウクライナ国家の破産を回避するということでした。目下破産寸前でしたから、国際通貨基金（IMF）や世界銀行などの国際金融機関からぜひお金を援助してほしいというのが緊急の案件でした。

当時、日本は経済的にも余裕があり、IMFや世界銀行などでナンバー2の地位を保っていたので、ウクライナ政府の閣僚や中央銀行の総裁が私をよく呼んで、IMFや世銀の中でウクライナへの援助を検討するときに日本からもぜひ口添えをしてそういう案件が通るようにやってほしい、それを本国政府にぜひ伝えてほしいということが多かったのです。そういうことを東京に取り次いで、日本は金融面でかなりウクライナを助けたということがあります。

他方、二国間ベースでも何かウクライナの国づくりに役立つことをしたいと思い、日本の政府開発援助

(ODA) を出すべきだということを東京の日本政府に提案して、ウクライナにも日本のODAを供与することになりました。

ウクライナの経済はそれでもなかなかうまくいきませんでした。日本という国が、あんなに遠い国なのに、ウクライナに対して非常に好意的にやってくれているということで深く感謝されました。これがずっと今までも続いています。ウクライナが現在も非常に親日的であるのは、このようなことが大きく貢献しているのだと思います。

困難の時代でありましたが、言ってみれば新しい国づくりという歴史の場面に直接関わり合うことができたということで非常に面白い時代でしたし、私自身も貴重な経験をしました。

そしてその際、日本ではウクライナという国があまり知られていないので、これは日本に紹介すべきだと思って、中公新書で『物語 ウクライナの歴史』という本を書きました。これが幸い好評を得て、それなりに売れたのですが、特に今回、今年のロシアによるウクライナ軍事侵攻ということがあって何週間か新書でベストセラーになりました。先ほどご紹介がありましたように、林真理子日大理事長にも読んでいただいて、その感想を書いておられたというようなことまでありました。

### **なぜプーチンはウクライナに侵攻したのか**

さて、今日は時間も限られていますので、ウクライナ問題の歴史的背景に限ってお話をしたいと思います。主たる話は、なぜロシア、特にプーチンがウクライナに軍事侵攻をしたかということです。

結論から最初にいいますと、これはロシア全体にもある感情ですが、特にプーチンに強いのは以下の考えです。

「1991年のソ連崩壊で並みの大国になってしまったロシアを再びかつてのような超大国に戻したい。それが自分の歴史的使命だ。そして、その目的を達成するために最も重要で、最初に手を付けるべきことは、ウクライナを取り戻すことだ」

以下、これについて敷衍していきたいと思います。

### **なぜロシアにとってウクライナはそんなに重要か**

これについては、主に3点考えられます。一つ目はウクライナの国力、二つ目は安全保障上の重要性、三つ目は国の格、或いはプライドの面から見たウクライナの必要性というものです。

#### **(1) 大きな国力を持つウクライナの重要性**

国力の面から、ロシアにとってなぜウクライナが重要かという、まず面積は64万4000平方キロで、日本の1.6倍もあります。ロシアを除けばヨーロッパでもっとも広い国です。人口も、独立した当時は5200万人ありました。今はかなり減っています。減った大きな理由は、経済がうまくいなくて食べていけないので外国へ出稼ぎに出たからで、国が安定して経済がうまくいくようになったらおそらく大部分の人たちは国に戻ってくるということで、私は独立のときの人口を採用しました。このように人口ではヨーロッパの中ではロシア、ドイツ、イギリス、イタリア、フランスに次ぐ大きな国です。

経済力で見た場合のロシアにとってのウクライナの重要性については、ソ連末期におけるロシアとウクライナの比率を見ると、人口はロシアの35.1%ですから、3分の1強です。国民所得は、GDPも4分の1強。工業生産は27.0%。農業生産でいうと48%。つまり農業でいうとロシアの半分ぐらい。ソ連の中でもウクライナは非常に大きな存在で、ウクライナなしではロシアは超大国に戻れないとロシアが思うのはある面なるほどだと思います。

現在のウクライナの経済は非常に悪く、一人あたりのGDPはヨーロッパで一番低い状況です。それはなぜかという、共産主義体制から健全な資本主義体制への転換がうまくいっていないということがありま

す。

一例として汚職の蔓延があげられます。これはロシアも似たような状況ですが、ソ連では低賃金で、しかも役所に異議を申し立てられないので、何か物事をやろうとしても動かないので、役人にこっそり賄賂を出して物事を進めるといった慣行が蔓延していました。ソ連の政府が強いときはある程度抑えながらやっていたのが、そのたがが外れてしまうと汚職に歯止めがかからなくなり、国中が汚職まみれになってしまったということです。それで富がにわか成り金、つまりオリガルヒに集中してしまう状況になったこと。

うまくいかなかったもう一つの原因は、ロシアがウクライナに干渉してスムーズな経済運営をできなくしたことがあります。例えばロシアからウクライナに出している天然ガスを止めてしまうとか、クリミア不法併合やドンバスでの騒乱状態を起こしてウクライナが経済発展に専念できないようにしてしまうことなどが頻発しました。

このようなソ連の負の遺産とロシアからの干渉の二つが重なって経済状態は非常に悪いままです。しかし潜在力はさっき言ったように非常に大きい国です。従ってロシアとしてはぜひこのウクライナが欲しいということです。

現在の一人当たりのGDPは悪いのですが、将来の希望としては、今、ウクライナではIT産業が非常に伸びつつあるということです。これはどういうことかということ、昔のソ連は共産主義で思想統制をしていたので、若い優秀な学生は、自由を束縛される文科系の法律や経済などを勉強するよりも、思想と関係ない理数系のところだったら自由に勉強できるということで優秀な人がそちらのほうにいて、理数系は非常にレベルが高いです。ウクライナにもその伝統は独立後も残っていて、経済は悪いけれども、教育には非常に熱心で、特に理数系に強いのです。

今は経済が悪いので多額の資本をつぎ込んで巨大な産業を育てる力はありません。お金がなくても頭だけでなんかできる産業はないかということ、それがITでした。ということで、キエフ工科大学とかそういうところの周りに、その教授、大学院生、学生が集まって、スタートアップ企業を始めたのです。外国もそれに目をつけてそこにお金を出すようになり、そういうものがだんだん増えてきて、日本の企業もウクライナのIT産業に投資したり支店をつくったりし始めていました。そして今回の侵攻までは、ウクライナは「東欧のシリコンバレー」と言われるくらいになりつつありました。ロシアとしてはそういう可能性のある国をぜひ取りたいということです。

そこでその続きとして人材という話です。先ほども触れたように、旧ロシア帝国やソ連においてもウクライナの人材は尊重されました。一時、ソ連共産党の最高決定機関の政治局員11名のうち4人がウクライナ人だったことさえありました。それほどウクライナの人材は尊重されました。

ソ連時代には、優秀な人材はモスクワやサンクト・ペテルブルグに行ってしまいましたが、ウクライナの独立後もその多くはロシアに残りました。例えばナワリヌイという人はプーチンに反対して毒を盛られたこともあり、今も刑務所に入れられている反体制派ですが、この人もウクライナ人です。またプーチンの腹心でコザークという人がいて、一部ではプーチンの後継者候補の一人だと言われていますが、彼もウクライナ系です。それからメジンスキーという人がいて、この人もウクライナ人ですが、今年の春にこの戦争が始まってからウクライナとロシアが和平交渉をやったときのロシア側の団長でした。ウクライナ人ですがロシア側のテーブルに座ったのはこのメジンスキーです。その他、フィールズ賞という賞があって、数学のノーベル賞といわれていますが、今年はウクライナ人のマリナ・ヴィヤゾフスカという人が選ばれました。このように人材は非常に豊富だということで、ロシア側としてはこういういろんな面で潜在力のあるウクライナが欲しいということだと思います。

## (2) 安全保障面から見たウクライナの必要性

ウクライナという国は、地図を見るとロシアとヨーロッパの間にあります。間にあるというだけでなく、

ウクライナはロシアに深く食い込んでいような位置になっています。この地政学的な位置がひとつの大問題で、ウクライナがどちらにつくかで、欧州のバランス・オブ・パワーは大きく変わると昔から言われてきました。第一次世界大戦でも、第二次世界対戦でも、ウクライナは東西の激戦地となりました。

ロシアの国境には山が少なく、平原が多いので、ロシアは昔から自分たちは無防備だと感じていました。従って隣に敵対的な国が存在することを極端に嫌います。そのため、自国を守るために、隣国に侵攻して併合して差し当たっての安心感を得ますが、領土が拡大したことによって新たな国と隣接することとなり、それが次の敵対国を生むので、また侵攻して、結果として広大な領土を獲得する大国になったと言われていています。つまり、防御的な意図を持ちながら結果としては侵略を重ねてきた歴史を持っています。

ウクライナはロシアに軍事的に侵攻しようという意図は全くないのでしょうが、ウクライナはロシアの脅威を感じています。従ってウクライナは純然たる防御的な見地からNATOに加盟したいのですが、それはロシアにとってはウクライナが敵対的な国になることを意味します。NATOに入ったからといってウクライナがロシアの安全保障上の脅威になるとは思えませんが、ロシアはNATOをはじめから敵対的と見ているのでウクライナを許せないのです。

更に、ウクライナがNATOに入ってしまうと、NATOの規約ではNATOの加盟国の1カ国に他国から攻撃があったときにはこれをNATO全体に攻撃があったとみなしてこれに対処するということですから、ウクライナがNATOに入ったらもうロシアとしてはウクライナを手に入れる機会を失ってしまいます。そういう面からロシアとしてはウクライナがNATOに入らないうちに取っておかないとという誘惑に駆られるようです。

### (3) 国の格、あるいはプライドの面から見たウクライナの重要性

#### キエフ・ルーシ大公国

この辺はなかなか日本人にはわかりづらい話ですが、これは両国の歴史と密接に関係した問題です。

ロシアとウクライナの共通の先祖はキーウ・ルーシ大公国です。ある面では兄弟のようなものだとも言われます。そこでロシアは自分が兄だと思っています。自分は兄で、キーウ・ルーシの遺産はロシアが全部引き継いだので、そのロシアの一部であるウクライナもロシアに戻ってくるべきだというのがロシアの言い分です。

キーウ・ルーシ大公国は、10世紀から11世紀に栄えた東スラブ民族最初の国家です。当時のヨーロッパで最大でした。都はキーウで、そのときこの国は初めてキリスト教、つまり東方正教会というかロシア正教というか、それを受容しました。そこでキーウはロシア正教発祥の地であり、ロシア人にとってもキーウは宗教的、精神的にも心の拠りどころになりました。

ただ、モスクワは後にロシアになっていくのですが、この当時モスクワは地図にも載らないような寒村でした。

ところが12世紀半ばにキーウ大公国はモンゴルの侵攻により崩壊しました。モンゴルはあのジンギスカンの帝国です。それがヨーロッパに攻めてきてキエフを陥落させました。そしてキーウ大公国は没落してしまいます。そうなるにキーウの辺り、つまり現在のウクライナは近隣の国、リトアニアやポーランドが順番に入ってきてウクライナを取って行って、ウクライナの地には国がなくなってしまいます。

ところが北の方にあったモスクワ公国はモンゴルの支配下に入ったのですが、その支配が弱かったこともあって、次第に力を伸ばしていきました。モスクワは、最初はモスクワ公国だったのが、大きくなるとモスクワ大公国と称するようになります。そのときのイヴァン3世という大公が、自分は全ルーシの君主だと自称しました。その時のモスクワ大公国はそれほど大きくはなかったのですが、それまでに領有したこともないルーシの全地域を自分の領地だと主張し始めました。

その後も領土を増やしていき、ついに1721年、ピョートル1世（ピョートル大帝）がモスクワという国

名を最終的にロシア帝国という名前に変えました。この「ロシア」という語はルーシのラテン語形だとかギリシャ語形だとか言われています。ロシアつまりルーシを名乗ることによってモスクワがルーシを乗っ取った形になったわけです。本来は辺境にあったモスクワが、俺はもうルーシ全体の跡取りだ、本家だと言い出して、これまで自分の領有したことの無い土地も、そこは父祖の地なのだから、自分は父祖の土地を取り戻すということを言い出したのです。その「父祖の土地」にはウクライナも含まれることとなります。こうしてロシアは17世紀の後半から1991年のソ連崩壊までの間に、少しずつウクライナの地を取って行って、ソ連の時代にはウクライナの西の一部を除いてほとんどを支配下におさめました。

### コサックの時代

ウクライナの地であって特筆すべきは、15世紀ごろからコサックという集団が生まれたことです。

これは、遊牧民によって蹂躪され無人地帯になったウクライナ中部・南部にポーランドやリトアニアなどから自由を求めて移住してきた人たちが、出自を問わない自治的なコミュニティを作り上げ、それがコサックと呼ばれるようになったものです。彼等は遊牧民から自分を守るために武力を持ちましたが、次第に彼等自体が強力になり、17世紀になるとほぼ独立の国家のようなものをつくりました。彼等はその出自がバラバラであったことで、定まった世襲のリーダーがおらず、リーダーは選挙で選ばれました。選挙で選ばれたため失敗すると解任もされ、処刑されることもありました。コサックの人々は自由と勇気を何よりも尊び、戦闘では非常に勇敢だったといわれています。

ただ、今述べたようなコサック発生の経緯から、この集団には世襲の王がいないため長期的なまとまりに欠け、更に当時は世襲の王がいない集団は独立した国家とは認められていなかったのも、どこか既存の王国の庇護を受けざるを得ず、いろいろな国に頼った挙句に17世紀後半に当時勃興してきたロシアに頼ったところ、そのロシアにつけ込まれ、遂にはロシアに征服されてしまうという運命に陥ります。

### ウクライナを支配するロシア

こうしてロシアは長い間ウクライナの大部分を支配してきたので、あれはもともと自分のものだったというふうに思うようになりました。ただ、ロシア本体と全く同質・同等な一部ということにはならず、本体ロシアは「大ロシア」、ウクライナは「小ロシア」と差別があり、ウクライナ語もロシア語の方言にすぎないと見られたり、ウクライナ語を抑圧したり、禁止したりしました。プーチンの発言や論文でも、両民族は同じだと言いながら、ウクライナは格下だと思っていることが明瞭に見てとれます。

### ウクライナ独立後のロシア

こうしてロシアは、ルーシの正統な後継者としての古い歴史を持つ大国を自任して圧倒的な自信をもってやってきましたが、1991年にソ連が崩壊してウクライナが分離してしまうと思いきや思わなかった事態が生じたことに気づきました。すなわち、こんな歴史的にも古い歴史を持つ大国だったはずなのに、その古い歴史の根拠であるキーウはロシアになく、ウクライナにあることに気付いたのです。これは私の勝手な表現ですが、キーウが自国にないことは、「京都、奈良がない日本」のようになってしまい、古い歴史も、ルーシの正統な後継者であることにも疑問が生ずることになってしまったことです。つまりキーウなしではロシアは旧ルーシ全体を統治する正当性にも疑問が生じることになりかねないのです。これはロシア人のプライドを大きく傷つけるものです。このように、国の格、プライドの観点からも、ロシアはキーウのあるウクライナの土地を取り込みたいのです。

### 宗教面でのロシアとウクライナ

このことは単に政治や歴史だけの問題ではなく、宗教面においても深刻です。西ヨーロッパは宗教と政

治の分離が達成されていますが、ロシアの地では政教が分離しておらず、政権が宗教を保護する、その代わり宗教が政権の正統性を担保するという持ちつ持たれつの関係でやってきました。特にキーウが重要なのは、キリストの十二使徒の一人の聖アンデレ（英国風に言うと聖アンドリュー）がキーウの丘に十字架を立てたという伝説があります。これは伝説だから史実とは思えませんが、そういうことになっています。キリスト教の中では、キリストの直接の弟子、使徒というのはとても重要で、ローマ教皇の権威がこれだけ高いのも、使徒の筆頭のペテロがローマに教会を建てたということがあるわけです。その点でいうと、聖アンデレがキーウに十字架を立てたとの伝説はロシア正教の人にとっては、非常に重要なことで、それが自分の国になく、ウクライナにあるというのは、非常に具合が悪いということです。従って、ロシアは政府もロシア正教会もキーウを取り戻したいのです。

#### （４）プーチンの歴史観

以上のような感情はロシア人の多くにあると思うのですが、その思いがとりわけ強いのがプーチンという人です。プーチンは、ソ連の秘密情報機関（KGB）の出身です。彼はソ連の時代にはKGBで働きました。

ソ連という国は共産主義というイデオロギーを基としてできた国です。共産主義を実施するために、普通の国とは違って土地の固有名詞を国名に入れず、普遍的な概念だけで「ソヴィエト社会主義共和国連邦」という国を作りました。「ソヴィエト」という語は、ロシア語で「協議会」という普通名詞で、固有名詞ではありません。しかし、その秘密組織のKGBは、イデオロギーはどうしてもよくて国としてのソ連を守るのがKGBの使命でした。

そういう組織に、プーチンは子どもの頃から憧れていました。彼が柔道をやったのはKGBに入るのに役立つからだという説もあるほどです。大国ソ連を心から信じてKGBに入って、ソ連が崩壊するまでそこに勤めていました。プーチンが尊敬したのは、ソ連結成時にソ連を構成している各共和国のソ連離脱権を認めたレーニンではなく、独裁で極端な中央集権体制を敷き、独ソ戦争に勝利して国を守ったスターリンでした。今ではレーニンはまともだったが、スターリンはひどかったというのが世間の認識ですが、プーチンは、レーニンが各構成協和国がソ連から自分の意思で分離できるということを認めたことは大間違いだと言っています。だから1991年構成共和国が分離権を行使して分離してしまったのではないか、そのためソ連という大国は崩壊してしまった。レーニンが間違っており、スターリンはソ連という国を守った偉大な愛国者だというものです。これがプーチンの基本的発想です。

プーチンによれば、1991年のソ連崩壊というのは西側に仕掛けられた陰謀によるもので、返す返すも残念なことだということです。これは我々から見ればとんでもない話で、アメリカを中心とした西側とソ連が経済面で競争して、結局ソ連のシステムが負けて自ら崩壊してしまったということで、ソ連の自業自得ですが、プーチンは、いや、あれはアメリカなどがいろいろ陰謀を仕掛けてつぶしたのであり、許せないと言っているわけです。

このソ連崩壊によってロシアは超大国から並の大国に転落してしまった。プーチンは就任した当時はそこまで考えなかったようですが、大統領を始めてから20年たって独裁的権限を持ったし、そろそろ自分のレガシーを考える時期に入っています。そうすると頭にあるのは、さっき言ったピョートル大帝とか、クリミア半島と南部ウクライナ（旧ノヴォロシア）を取ったエカテリーナ女帝2世、こういったロシア史の英雄に自分も肩を並べたいということになったのでしょう。そのためには既に述べたように最も重要なウクライナをまずぜひ取りたいということだと思います。プーチンの執務室にはピョートル大帝とエカテリーナ2世の肖像画が飾ってあるという話です。プーチンが言うには、ロシアはキーウ・ルーシの後継者で、従ってかつてのルーシの全土を取り戻す権利がある。ウクライナはロシアの一部で国家ではないし、主権もないと言っています。つまり自分たちがルーシ全体を取る権利を持っているのだから、その中にあるべ

きウクライナが独立国だということはあり得ない。ロシアのものだから取るということだと思えます。

## (5) ロシアと訣別したいウクライナ

それではウクライナはどう思っているかという、ロシアはそういうことを言うが、ウクライナはロシアとは違う民族だということです。民族・言語・文化は近いけれども確実に違うと主張しています。

ロシアは、自分がキーウ・ルーシの後継者だというけれども、むしろキーウ・ルーシの本来の伝統を引き継いでいるのはウクライナだと言います。現にその都キーウもウクライナにあるし、正教の発祥地もキーウにあると。

それからロシアの国民性が集团的、専制的、大国主義的、暴力的なのに対して、ウクライナは個人の自由を尊重し、民主主義的だと。この民主主義的というのは、必ずしも西欧の民主主義そのものではないのですが、さきほどのコサックのように専制君主をつくらないとか、各人が勝手なことを言って、その中で何とかやっていくといったタイプの民主主義ですが、そういうものであると。それにロシアのような大国主義もないから、全然違うと、従って一緒にはやっていけないと言っています。

歴史的にも、ウクライナは随分昔からロシアに対する独立闘争をしてきた。第一次世界大戦のときに一時独立したが、ロシアのボリシェヴィキに潰されてしまった。そして1991年の独立以来、ロシアは何度も条約でウクライナの主権と国境不可侵を約束している。ロシアは諸条約でウクライナの主権や国境不可侵を認めておきながら、ウクライナはロシアの一部だとか、ウクライナという国はないのだとかいうのは全くおかしい。そんな国とどうして一緒になれようか——ということなのです。

将来の話でも、ロシア的な政治・経済のやり方、つまりソ連は石油、天然ガスが豊富なために経済が成り立っているが、ウクライナにはない。そういうところでロシア的なものをやってもうまくいくはずがないということです。また将来ウクライナが世界で競争力を持ってやっていけるような産業のモデルはロシアにはないではないか。ロシアを見習ってもウクライナは発展できないと。やっぱり西側しかないということなのです。

最後に決定的な点として、ウクライナはもちろんロシアに脅威を与える存在でもないし、その能力も意思もない。外交面ではできるだけロシアと協調するように努めてきた。それにもかかわらず2014年には国際法に違反してクリミアを一方的に併合し、ドンバス地方に介入した。そしてこの度は本格的な武力侵攻を加えてきた。これはウクライナの忍耐の限度を超えるもので、ウクライナとしてはこのピンチをチャンスに変えて全領土を回復して、何世紀にもわたる対ロシア独立戦争を終わらせたいとしています。

## おわりに

最後に再び結論を繰り返しますが、ロシア、特にプーチンは、1991年のソ連崩壊で並の大国になってしまったロシアを再びかつてのような超大国に戻したいと思い、その目的を達成するためにロシアが最も重要と考えるウクライナを取り戻すことだとして今回の軍事侵攻を行ったと思われまます。

これは国際法的にも、道義的にも、そして人道的にも身勝手極まりない暴挙ですが、プーチンはプーチンなりの歴史的な経緯というものを踏まえたロシア大国願望にここ数年来憑りつかれて、ついにこの軍事侵攻を始めたということではないかと思えます。

まだまだ言い足りないことがいろいろありますが、時間も過ぎましたので、ここまでといたします。ご清聴ありがとうございました。